

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020年 6月

「闘争と勇氣」「幸せな家族（1）」「目的のない生き方はしない」「味噌ポテト」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

幸せな家族(Ⅱ)

4

聖書の教え

朝のマナ

闘争と勇気

8

Conflict and Courage

現代の真理

「目的のない生き方はしない」

39

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事

「味噌ポテト」

44

レシピ

お話コーナー

「キリストの死(Ⅱ)」

46

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

発行日 2020年5月4日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Image on Front page; Sermon View
on page 44

起きて悔い改めるべき教会

教会は起きて、神のみ前の背信を悔い改めなさい。見張り人は目覚めて、確かなラッパの音を出しなさい。わたしたちが宣布しなければならないのは、はっきりとした警告である。神はご自分の僕らに次のように言われた。「大いに呼ばわって声を惜しむな。あなたの声をラッパのようにあげ、わが民にそのとがを告げ、ヤコブの家にその罪を告げ示せ」(イザヤ 58:1)。民の注意を集めなければならない。そうでなければこれを成し遂げることはできず、すべての努力は無駄である。天からの使が下りてきて彼らに語っても、その言葉は、死者の冷たい耳に語りかけるのとまったく同じである。

教会は目覚めて行動しなければならぬ。神の御霊は、教会が道を備えない限り、決して中に入って来られることはない。真剣に心を吟味しなければならない。一致した辛抱強い祈りがあるべきである。そして信仰を通して神のみ約束をわがものと主張すべきである。昔のように体に荒布をまとうのではなく、魂の深いへりくだりがあるべきである。…わたしたちは神の力強い御手の下に自らをへりくだらせるべきである。このお方は真に求める人々を慰め、祝福して下さる。

働きはわたしたちの前にある。わたしたちはそれに携わるであろうか? わたしたちは速やかに働かなければならぬ。着実に前進しなければならぬ。わたしたちは主の大いなる日のために準備していなければならない。わたしたちには失う時間はない。利己的な目的に携わっている時間はない。世は警告を受けなければならない。わたしたちは個人として、他の人々の前に光をもたらすために何をしているであろうか? 神はすべての人にその人の働きを任された。すべての人に果たすべき役割がある。そしてわたしたちがこの働きをなおざりにするなら、自分自身の魂を危険にさらすのである。

わが兄弟方よ、あなたがたは聖霊を悲しませ、それによって離れさせるのであろうか。あなたがたは祝福された救い主のご臨在のために準備ができていないために、このお方を締め出すのであろうか。あなたがたは自分があまにも安逸を愛し、イエスがあなたがたのために負ってくださった重荷を負わないがために、魂を真理の知識なく滅びるままに放置するのであろうか。眠りから目覚めようではないか。「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるしのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている」(ペテロ第一 5:8)。(ヘクゼッド・メッセジ 1巻「16章リバイバルへの召し」より 126,127)

第17課 幸せな家族 (I)

完全な家庭

ある芸術家が、安全、愛、平安を表す絵を描くように依頼されました。それぞれの言葉の特徴について注意深く考えた後、彼はついに、これは幸せな家庭の平安と安全を描写することにより最も良く表現できるだろうと考えました。

確かにこれはすべての人にとっての理想であり、また夢です。多くの人々が、地上における本当の幸せと満足という望みと天来の祝福の生活、を夢見していますが、この究極的な目標を成就している人は、どれほど少なく見えることでしょう。

ほとんどの結婚は、パートナーが共に祝福された希望や将来の夢という栄光に満ちた雲に乗り、正しく始められます。しかし、なぜ、心痛や分離をもって崩壊が訪れるのでしょうか。なぜ、当惑した子供たちと離婚した親のいる不幸な家庭がこれほど多くあるのでしょうか？

人類の向上は、個人から始まり、家族の中で生きる時現実となります。家庭の感化は近隣を越えていきます。それは複数の家族で構成されている社会全体に感化を及ぼします。社会は家族が幼少時以来、自分自身で学び、実践してきたこと以上の産物を何も提供できないとき、霊的にも道徳的にも墮落します。財産、お金、地位、名誉はそれぞれ役割がありますが、これらは永続的な幸福をもたらすことはできません。永続的な幸福は、神をおそれて生きることが、実践的に、経験的に存在するところのみ、見いだすことができます。全ての人は幸せになるべきであり、そして、それはすべての人の手に届くところにあります。

幸せな家族の起源

「人にはふさわしい助け手が見つからなかった。」(創世記 2:20)。そのため、神は伴侶となる人を創造なさいました。「また主なる神は言われた、『人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。』」(創世記 2:18)。

神が男女を創造し、聖なる婚姻のうちに彼らを結ばれたとき、彼らは完全でした。人が孤独に暮らすようには造られませんでした。わたしたちの創造主は、二つの命を一致というきずなで結び合わせることにより、「婚姻の律法」を制定さ

れました。「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。」(創世記 2:24)。「彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない。」(マタイ 19:6)。

エデンの園は、神が最初の夫婦にお与えになった贈り物のうち、最も美しいものでした。そこには素晴らしい環境があり、それは地上における将来の幸せな家族のための家庭と家庭環境の型でした。

人が墮落して間もなく、祝福されていた結婚という制度は非常に低められ、地上の住民の聖化されていない結婚(および他の悪事)に対して神がもはや許容しえないほどになりました。この墮落は、神の残りの子らに対して壊滅的な影響を及ぼしたため、その結果、神は大洪水によって、墮落した地上の住人を滅ぼされました。

「人が地のおもてにふえ始めて、娘たちが彼らに生れた時、神の子たちは人の娘たちの美しいのを見て、自分の好む者を妻にめとった。」(創世記 6:1,2)。

義人の子らと神を信じない子らとの間の不法な結婚は、全地を通じて急速な悪の拡散をもたらし、大洪水の前の人々を絶滅に至らせました。このつり合わないくびきは、今日に人類の墮落の原因の一つとなっています。「不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。キリストとベリアルとなんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があるか。」(コリント第二 6:14,15)。

神のご目的は、福音を通して結婚を最初の状態に回復することです。様々な理由で分離してきた家族は、福音を通して、再び一つになることができます。親と子は、幸せな家庭において一つにつながるべきです。

「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」(マラキ 4:5, 6)。「…確かに、エリヤがきて、万事を元どおりに改めるであろう。」(マタイ 17:11)。

完全な回復は、神のみ言葉と調和することによってのみ、本当に成し遂げられます。

夫の責任

家庭での幸せの大部分は、夫に依存しています。彼は、家庭内の幸福について関心をもつべきです。妻と子どもに対する彼の同情が重要不可欠です。彼の言葉はやわらかく、親切で、優しさにあふれながらも、確固たるものでなければ

なりません。賢人は次のように述べました。「柔らかない答は憤りをとどめ、激しい言葉は怒りをひきおこす。知恵ある者の舌は知識をわかち与え、愚かな者の口は愚かを吐き出す」(箴言 15:1,2)。

夫は、彼が家族について責任を負っていることを忘れてはなりません。「キリストが教会のかしらであって、自らは、からだなる教会の救主であられるように、夫は妻のかしらである。」(エペソ 5:23)。

夫はかしらではありますが、妻を踏みつけるようなことがあってはなりません。エバは、アダムのわき腹から取られました。これは彼女の立つ場所がアダムの傍らであることを象徴していました。エバは支配するのではなく、助け手となり、連れ合いとなるのでした。夫は妻を愛さなければならず、互いに補い合うのでした。

「夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。」(エペソ 5:25)。

夫が帰宅する時には、その日に起きた問題を家庭にもちこんではなりません。彼は、いつでも家族のために微笑みと丁寧な言葉をそなえているべきです。彼の妻と子どもたちは、彼の同情、やさしさ、愛と同様に、彼の助言、力、助けを必要としています。「すみません」、「ごめんなさい」、「ありがとう」という言葉が、彼の口から即座に出てこなくてはなりません。

良い人は、知恵をもって自分の家族を治めます。「しかし上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りが無い。」(ヤコブ 3:17)。

子どもに対する両親の態度はとても重要です。両親が良い模範を示すと、子どもたちはすぐに従います。行動は言葉よりも雄弁です。両親は、子供をいらだたせてはなりません。「父たる者よ。子供をおこらせしないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい。」(エペソ 6:4)。

夫が自分の義務を果たすなら、家庭における幸せのための最初の第一歩を踏み出したこととなります。

妻の責任

幸せはまた、妻にも依存しています。彼女は、家の中の家具備品に満足していないかもしれません。不必要なつぶやきが生じるかもしれません。過労や疲労により、彼女の忍耐力が奪われるかもしれません。夫が帰宅したときに、彼にその日の問題をみなぶつけるべきではありません。ソロモンは次のように言いました。「争い怒る女と共にいるよりは、荒野に住むほうがましだ。」(箴言 21:19)。

「そして教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである。」(エペソ 5:24)。「妻たる者よ、夫に仕えなさい。それが、主にある者にふさわしいことである。」(コロサイ 3:18)。

夫が不合理であり、主のみ旨に反することを要求したならば、妻は従うべきではありません。しかし、もし彼の要求が主の要求と調和しているならば、夫の決定を受け入れ、従うのが妻の義務です。なぜなら、それは主のご命令だからです。しかし、ほとんどそのような必要はありません。なぜなら、両者とも互いに協力して働いており、決定をする前に、相手の必要や希望を考慮しているからです。

父親が家庭から離れている間、妻が子供たちを教育し、彼らの品性を形成する責任を負っています。この責任は一生涯つづくものであり、もし忠実であれば、地上では良い原則に基づいた家族の美しい資質という報いを、また天では分かつたれていない家族という約束をもって報いを受けます。

テモテの母親と祖母は、忠実な女性の模範です。「また、あなたがいだいでいる偽りのない信仰を思い起している。この信仰は、まずあなたの祖母ロイスとあなたの母ユニケとに宿ったものであったが、今あなたにも宿っていると、わたしは確信している」(テモテ第二 1:5)。

勤勉で信仰深い女性は、どんな物質的な財産よりも価値があります。「だれが賢い妻を見つけることができるか、彼女は宝石よりもすぐれて尊い。その夫の心は彼女を信頼して、収益に欠けることはない。彼女は生きながらえている間、その夫のために良いことをして、悪いことをしない。... 彼女は家の事をよくかえりみ、怠りのかてを食べることをしない。その子らは立ち上がって彼女を祝し、その夫もまた彼女をほめたたえて言う」(箴言 31:10-12, 27, 28)。

闘争と勇気

Conflict and Courage



6月

真に悲しんではない

「あなたが主のこぼを捨てたので、主もまたあなたを捨てて、王の位から退けられた。」(サムエル記上 15:23)

サウルは、預言者の告発に震えおののいてこれまで頑強に拒否していた罪を認めた。しかし、彼は、なお、罪を犯したのは、人々を恐れたからであると言って民を非難していた。

イスラエルの王は、罪を悲しんだためではなくて、刑罰を恐れたためであった。……彼は、自分の権威を保ち、民の忠誠を保持することをまず第一に考えていた。……サムエルが去ろうとすると、王は、震えおののき、彼の上着をつかまえて引きもどそうとしたところ、それは裂けてしまった。そこで預言者は言った。「主はきょう、あなたからイスラエルの王国を裂き、もっと良いあなたの隣人に与えられた」。……

サウルは、彼の高い地位に心がおごり、不信と不服従によって、神のみ栄えを汚した。彼は、最初王位に召されたときには、けんそんで自己の力にたよっていなかったが、成功するにつれて、自己過信に陥った。……犠牲のささげ物は、ただそれだけでは、神の前になんの価値もない。それは、犠牲をささげる者が、罪の悔い改めとキリストを信じる信仰を表わし、将来神の律法に従うことを約束することをあらわすためのものであった。しかし、悔い改めと信仰と服従心がないならば、ささげ物に価値はない。サウルは、神の命令に真正面から反逆して、神が滅ぼせと言われたものをささげ物にしようとしたときに、彼は、公然と神の権威を軽べつした。儀式は、天の神に対する侮辱であった。

サウルの罪とその結果を眼前に見ながら、なんと多くの者が同じ道を歩いでいることであろう。彼らは、主の要求の一部を信じて従うことを拒んでいるにもかかわらず、形式的な礼拝は熱心に続けている。こうした礼拝には、神の霊の応答がない。もし人々が、神の戒めの一つを故意に犯し続けているならば、彼らがどんなに熱心に宗教の儀式を守ったとしても、主は、それをお受けになることができない。(人類のあけぼの下巻 303-307)

6月2日

ほとんど正気を失う

「サムエルはサウルに言った、『あなたと一緒に帰りません。あなたが主の言葉を捨てたので、主もあなたを捨てて、イスラエルの王位から退けられたからです。』」
(サムエル記上 15:26)

サウルはサムエルがそれ以上自分に指図しようとしないうちを見て、自分がよしまな針路を取ったがために、主が自分を拒まれたことを知って、自分の品性がその後いつも極端に採点されているように思えた。サウルの家来たちは……時々あえて彼に近づかなかった。それは彼が精神に異常があるように見え、暴力をふるい暴言を吐いたからである。サウルは度々悔恨の情がこみあげてくるように見えた。ふさぎ込んでは、何の危険もないときに恐れた。……彼はたえず不安にさいなまれ、憂鬱な気分になると邪魔をされないことを望んだ。そして時々誰も自分に近づくことを許さなかった。……彼は重臣の前でも民の面前でさえも狂気じみた勢いで自分自身に不利な預言的な言葉をくり返した。

サウルのうちにあるこのような不思議なありさまを目のあたりに見た人々は、そのように心を取り乱した時に彼の心を落ち着かせることができるようにと音楽をサウルに勧めた。神のみ摂理のうちに、有能な音楽家としてダビデが見つかった。

琴をかなでるダビデの巧みな調べは、サウルの悩む心を落ち着かせた。彼が、調べのうっとりさせる旋律を聞く時、その調べは彼の上に重くのしかかっている憂鬱を追い払い彼の興奮した心をもっと正常なまた幸福な状態になるという効果をもたらした。(霊的賜 4 巻一部 78, 79)

サウルは、神の戒めへの服従を人生の規範とすることに失敗したために力を奪われた。人間にとって、その詳細にわたる要求に明示されている神の意志に反して、自らの意志を据えるのは、恐るべき事である。国の王座にあって人が受けることのできるすべての栄誉は、天への不忠行為を通して神の恩恵を失う埋め合わせとするには余にも貧弱である。神の戒めに対する不服従は、結局災いと恥辱をもたらすことしかできない。ちょうど、神がサウルにイスラエルの統治を任命されたように、神はまさしくすべての人に働きをお与えになった。また、私たちに對する実用的かつ重要な教訓は、私たちが、悲しみではなく、喜びをもって生涯の記録に出会えるような方法で、任命された働きを成し遂げるべきだということである。(SDA バイブルメント [E・G・ホバ・コメント] 2 巻 1018)

人の選びではなく神の選び

「さて主はサムエルに言われた、『角に油を満たし、それをもって行きなさい。あなたをベツレヘムびとエッセイのもとにつかわします。わたしはその子たちのうちにひとりの王を捜し得たからである。』」(サムエル記上 16:1)

犠牲をささげ終わって、一同が供え物のふるまいにあずかるに先立ち、サムエルは堂々たる外見をしたエッセイのむすこたちを預言者の目で見始めた。最年長のエリアブは、背の高さといひ美しさといひ、他のだれよりもサウルに似ていた。彼の顔かたちとよく発達した体格は預言者の注目をひいた。彼の貴公子のような姿を見たサムエルは、「この人こそ、神がサウルの後継者として選ばれた人だ」と思った。……ところが主は、外観を見られなかった。エリアブは、主をおそれなかった。もしも彼が王位に召されたならば、高慢で苛酷な支配者になったことであろう。

顔かたちが美しいからといって、神によく思われることはできない。品性と行為にあらわれる知恵と美徳が、人間の真の美を表現する。内面の価値と心の卓越性が、万軍の主を受け入れられるかいなかを決定するものである。われわれは、自己、または、他人を評価するに当たって、この事実を深く感じなければならぬ。顔の美しさや姿の気高さによる評価が当てにならないことを、サムエルの失敗から学ばなければならない。(人類のあけぼの下巻 311, 312)

サムエルがえらぼうとした兄たちは、神がイスラエルの王として必要と思われる資格をそなえていなかった。高慢で、自己中心で、自信に満ちた彼らは退けられ、彼らから軽くみなされていた者、青年らしい単純さと誠実心をもった者、自分で自分をとるに足りないものに思っていた者、王国の責任を負うために神から教育される可能性のある者が選ばれた。同じように今日も、非常に有望視されている子供にあらわれている才能よりも、はるかにすぐれた才能が親からみすごされている多くの子供たちの中にひそんでいるのを、神はご覧になるのである。人生の機会については、だれがその大小を決定することができるだろう。社会の低い地位にありながら世人の祝福となる活動を始めて、王侯もうらやむような業績をなしとげた働き人がどんなに多いことであろう。(教育 315)

6月4日

指導するための準備

「しし、あるいはくまがきて、群れの小羊を取った時、わたしはそのあとを追って、これを撃ち、小羊をその口から救いだしました。その獣がわたしにとびかかってきた時は、ひげをつかまえて、それを撃ち殺しました。」(サムエル記上 17:34, 35)

ダビデは、ますます神と人から愛された。彼は、主の道を歩くように教えられていたが、ここで、これまで以上にもっと神のみこころを行なおうと決心した。彼は、新しい主題について考えていた。彼は、王の宮廷に出入りして、王の責任がどんなものであるかを悟った。彼は、サウルの魂を悩ます誘惑を見だし、イスラエルの最初の王の性格と行状の秘密を見抜いた。彼は、王の栄光が悲哀の暗雲におおわれるのを見、サウルの一族の家庭生活が、幸福なものでないことを知った。イスラエルの王として油を注がれたダビデにとって、こうしたことはすべて心配の種であった。しかし、彼は、物思いに沈み、心が苦しくなると、琴をかきならしてすべてのよい物の与え主であられる神のことを考えるのであった。こうして、彼の将来をかげらせるように思えた暗黒が消えるのであった。

神は、ダビデに信頼という教訓を与えておられた。主は、モーセをその任務のために訓練されたように、エッサイのむすこに神の選民の指導者になる準備を与えておられた。彼は、自分の羊群の世話をしながら、偉大な牧者であられる主が、彼の牧場の群れを養われることを理解した。

ダビデが、羊群を連れて放浪した寂しい山や険しい谷間には、野獣が横行していた。ヨルダンの茂みからライオンが出てきたり、山のほら穴から腹をへらしてどう猛になった熊が出てきて、羊群を攻撃することもよくあった。ダビデがそのころの習慣に従って持っていた武器は、石投げと羊飼いのつえだけであった。しかし、彼は、早くからゆだねられたものを保護する能力と勇気を持っていたことを示した。……

ダビデは、こうした経験に会ってその心がためされ、勇気と堅忍不拔の精神と信仰とが強められていった。(人類のあけぼの下巻 317, 318)

人間の誇示

「またこのペリシテびとは言った、『わたしは、きょうイスラエルの戦列にいどむ。ひとりを出して、わたしと戦わせよ。』」(サムエル記上 17:10)

イスラエルがペリシテ人に宣戦を布告したとき、エッサイの三人のむすこたちは、サウルの軍に加わった。しかし、ダビデは、家に残っていた。ところが、しばらくたって、ダビデはサウルの陣営をたずねた。彼は、父の命によって、兄たちのところへ伝言と贈り物を持っていき、彼らが安全で元気かどうかを見とどけてくることになった。……ダビデが軍隊に近づくと、今にも戦いが始まるような騒がしい物音がした。

ペリシテ人の勇士ゴリアテが現われ、無礼な言葉でイスラエルに戦いをいどみ、彼と一騎打ちをする者を出せと言った。……

イスラエルの軍勢は、四十日間もペリシテの巨人のごう慢な挑戦に震えていた。彼らは、身のたけが六キュビト半(約三メートル)もある巨大な姿を見ておじけづいた。彼は頭に青銅のかぶとをかぶり、身には重さ五千シケルのよろいを着ていた。また足には青銅のすね当てを着けていた。このよろいは、青銅の板をうろこのように重ねたもので、どんなやりや矢も通さないように細かく結び合わされていた。巨人は、肩には青銅の投げやりを背負っていた。「手に持っているやりの柄は、機の巻棒のようであり、やりの穂の鉄は六百シケルであった。彼の前には、盾を執る者が進んだ」。(人類のあけぼの下巻 318-320)

イスラエル人はゴリアテに戦いを挑まなかったが、ゴリアテは神と神の民に対してうぬぼれて誇った。戦いをいどんだり誇示したり暴言を吐くことは真理の敵から来るのであり、この人々はゴリアテのように行動する。しかしこの精神は神が運命の定まった世界に最後の警告の使命を宣布するために送られる人々の内に少しも見られてはならないものである。

ゴリアテは自分の武器に頼っていた。彼は自分の強さであった堂々とした鎧かぶとを誇りながら、傲慢で残忍な誇示でイスラエル軍を恐れさせた。(教会への証 3巻 218, 219)

6月6日

なめらかな5個の石

「ダビデはまた言った、『ししのつめ、くまのつめからわたしを救い出された主は、またわたしを、このペリシテびとの手から救い出されるでしょう』。サウルはダビデに言った、『行きなさい。どうぞ主があなたと共におられるように。』」(サムエル記上 17:37)

ダビデは、すべてのイスラエル人が恐怖に満ちているのを見た。そして、ペリシテ人の挑戦を毎日耳にしながらも、だれひとり高慢なゴリアテを沈黙させる勇士が現われないのを知って、ダビデは奮起した。彼は、生ける神の誉れと神の民の名誉を保つ熱心に燃え立った。(人類のあけぼの下巻 319)

神と自分の民のために、ダビデは謙遜と熱心さをもってこの誇る者に相對することを申し出た。サウルは承諾して、自分自身の王の武具をダビデに着せた。しかしダビデはそれを身に着けるのに同意せず、王の武具を脱いだ。それに慣れていなかったからである。ダビデは神に慣れており、神を信頼して特別な勝利を得たのであった。サウルの武具を身に着けるということはダビデが羊の番をしていた少年にすぎないのに彼が戦士であるという印象を与えることになるのであった。彼はどのような信頼もサウルの武具に置くつもりはなかった。なぜなら彼の信頼はイスラエルの主なる神にあったからである。(教会への証 3巻 219)

彼は、谷間からなめらかな石を五個選んで持っていた袋に入れ、手に石投げを持ってペリシテ人に近づいた。巨人は、イスラエルの最も強い勇士と対戦することを期待して、大まかに進んできた。盾を執る者が彼の前に進んだ。彼に対抗することができる者は、だれもないように思われた。彼が、ダビデに近づいてみると、ダビデはまだ若々しい少年にすぎないことがわかった。ダビデの顔は健康で血色がよく、彼のよろいを着ていないからだは、がっちりしていて身軽で有利にみえた。しかし、若々しいダビデの姿と、ペリシテ人の巨大な体格とは、著しい対照であった。

ゴリアテは、驚きと怒りに満ちた。「つえを持って、向かってくるが、わたしは犬なのか」と彼は叫んだ。そして、彼は、自分の知っているすべての神々の名によって、恐ろしいのろいの言葉をダビデに浴びせた。彼は、あざわらって叫んだ。「さあ、向かってこい。おまえの肉を、空の鳥、野の獣のえじぎにしてくれよう」。(人類のあけぼの下巻 321, 322)

確かな結果

「ダビデはペリシテびとに言った、『……わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエルの軍の神の名によって、おまえに立ち向かう。』」(サムエル記上 17:45)

ゴリアテはダビデをののしり、自分の神々によって彼をのろった。ゴリアテは武器すらつけていない単なる若者が自分に対戦するのは自分の威厳に対する侮辱であると感じた。……ダビデは非常に劣ってみられてもいらせせず、ゴリアテのおどかしにもおののかず、「おまえはつるぎと、やりと、投げやりを持って、わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエルの軍の神の名によって、おまえに立ち向かう」と答えた。(教会への証 3巻 219)

よく通る音楽のような声で語られたこの言葉は、空に鳴り響き、戦いに召集された幾千の者にははっきりと聞きとれた。ゴリアテの怒りはその極に達した。彼は激しい怒りに燃えて、彼のひたいを保護していたかぶとを押し上げて、敵に恨みを晴らそうと走りよった。エッサイのむすこは、敵に立ち向かう用意ができていた。「そのペリシテびとが立ちあがり、近づいてきてダビデに立ち向かったので、ダビデは急ぎ戦線に走り出て、ペリシテびとに立ち向かった。ダビデは手を袋に入れて、その中から一つの石を取り、石投げで投げて、ペリシテびとの額を撃ったので、石はその額に突き入り、うつむきに地に倒れた」。

両軍の兵隊たちは驚いた。彼らは、ダビデが殺されるものと思い込んでいた。しかし、石が宙に飛んで、目標に的中したときに、彼らは、大きな勇士がちょうど突然に撃たれて目がくらんだように、震えおののいて両手を上げるのを見た。巨人は、かしの木が倒れるように揺れ動いて、地に伏した。ダビデは、一瞬もためらわなかった。彼は、ペリシテ人のうつぶしたからだの上に飛びかかり、そのゴリアテの重い剣を両手でつかんだ。巨人はついさきほど、そのつるぎで青年の首を切って、彼のからだを空の鳥に与えると豪語した。ところがそのつるぎが、今、高く振り上げられて、豪語した者の首は切り落とされ、そして、イスラエルの軍勢には、歓喜の叫びが起こったのである。(人類のあけぼの下巻 322, 323)

6月8日

だれも憂えない

「あなたがたは皆共にはかってわたしに敵した。……またあなたがたのうち、ひとりもわたしのために憂え…ない。」(サムエル記上 22:8)

悪霊がサウルに臨んでいた。イスラエルの王座から失脚させられるという厳粛なメッセージによって、自分の運命は決定されていると彼は感じた。神の明確な要求から離れたことが、その確実な結末をもたらそうとしていた。彼は引き返すことも、悔い改めることも、また神のみ前に心を低くすることもしないで、敵のあらゆる提案を受けることに心を開いた。イスラエルの王座を継ぐようにと油を注がれた者に対し、ますます激しくなる妬みと憎悪をむき出しにすることの言い訳を見つけようと望んで、彼はあらゆる偽証人に耳を傾け、ダビデの品格に害を及ぼすものなら何であっても真に受けた。

ダビデのかつての性質や習慣とどれほど矛盾し、かけ離れていようと、あらゆる噂が信用された。

神の保護がダビデの上にあるというすべての証拠は、夢中になって決意を固めたサウルの一つの目的を募らせ深めるかのように思われた。彼自身のもくろみ遂行の失敗は、彼の搜索をうまく回避している逃亡者と、著しい対照をなした。しかしそれは、王の決意をますます容赦のない、断固としたものにしただけであった。彼はダビデに対する自らのもくろみを注意深く隠そうとせず、目的を果たすのにどのような手段が用いられるのかについても周到ではなかった。

王が戦いを挑んでいたのは、彼に何の危害も加えなかった人間ダビデに対してではなく、天の王に対してであった。エホバに支配されない心をサタンが支配することを許されるとき、サタンは思いのままにその心を誘導し、このように彼の権力下にいる者は、ついに彼のもくろみを遂行するための有効な手先となるのである。神の御目的に対する罪の創始者の敵意は余りに痛烈で、彼の邪悪な力は余りにも恐ろしいものであるために、人々が神から離れると、サタンが彼らを感じ化し、彼らの心はますますその支配下に陥り、ついに彼らは神に対する恐れと人権の尊重を投げ捨てて、神とその民の大胆かつ公然たる敵になってしまうのである。……神はすべての罪を憎まれるので、人が執拗に天の勧告をことごとく拒むとき、彼は敵の欺瞞の中に取り残される。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホワイト・コメント] 2 卷 1019)

ほら穴の中での歌

「わたしの魂はししの中にいます。そしてわたしは火を燃え立たせる者の中に横たわっています。」(詩篇 57:4 欽定訳)

失望または落胆した魂に働きかけ、気落ちした者を励まし、衰えた者を強め、試練の中にある主のしもべたちに勇気と力を与える神の霊のお働きはなんと尊いことであろう。また、われわれの神は、なんとという神であろう。神は、誤った者をやさしく扱い、われわれが逆境または、大きな悲しみに圧倒されているときにも忍耐深くあわれんでくださるのである。

神の子供たちの失敗は、みな彼らの信仰の欠如が原因である。魂が暗黒におおわれ、光と指導が必要になったときには、見上げなければならない。暗黒のかなたに光がある。ダビデは、一瞬でも神に対する信頼を失ってはならなかった。彼は、神に信頼する十分の理由があった。彼は、主に油を注がれていた。そして、危険のさ中であって、神の天使に守護されていたのである。彼は驚くべきことを行なう勇気が与えられていたのである。そして、彼が、自分の置かれた窮地から目を離して、神の力と威光とを考えさえしたならば、彼は死の陰のさなかにあっても、平安を保つことができたのである。……

ダビデはユダの山の中で、サウルの追跡を避けていた。彼は、アドラムのほら穴へ逃げた。ここはわずかの人数で、大きな軍勢を防ぐことができた。「彼の兄弟たちと父の家の者は皆、これを聞き、その所を下って彼のもとにきた」。……

アドラムのほら穴で、家族は同情と愛に結ばれた。エッサイのむすこは、楽の音に合わせて歌うのであった。「見よ、兄弟が和合して共におるのはいかに麗しく楽しいことであろう」。彼は、自分の兄弟たちに信用されないつらさも味わったことがあった。不和に代わって和合が実現したことをダビデは心から喜んだ。ダビデは、ここで詩篇第 57 篇を作った。(人類のあけぼの下巻 335, 336)

6月10日

狂気の結末

「王は言った、『アヒメレクよ、あなたは必ず殺されなければならない。あなたの父の全家も同じである。』」(サムエル記上 22:16)

人間が神の勧告を離れるならば、正義と分別をもって行動する冷静さと知恵を保つことができなくなる。神の知恵の指導を仰がないで、人間の知恵に従うことほど恐ろしく、絶望的狂気はない。

サウルは、アドラムのほら穴で、ダビデをわなにかけて捕えようとしていた。ところが王は、ダビデがこの隠れ家を去ったことを知って、非常に怒った。サウルは、どうしてダビデが逃亡したのかわからなかった。これは必ず陣営の中に裏切り者がいて、王の接近と計画とをエッサイのむすこに知らせたとしか考えられなかった。

彼は、自分に対する謀叛が起こったにちがいないと家来たちに告げ、多くの報賞と名誉ある地位を約束して、彼の国民のうちでだれがダビデの味方になったかを聞き出そうとした。エドム人のドエグが通報者になった。彼は、野心と貪欲に動かされるとともに、彼の罪を責めた祭司に対する憎悪とから、ダビデがアヒメレクを訪問したことを知らせ、神の人に対してサウルを激怒させるような言い方をした。あの邪悪な舌の言葉は、地獄の火を燃やし、サウルの心の最も醜い感情をかき立てた。彼は怒り狂って、祭司の全家族に死刑を宣告した。そして、その恐ろしい命令は執行された。アヒメレクだけでなく、彼の父の家族の者たち、「亜麻布のエポデを身につけている者八十五人」が王の命令のもとに、ドエグの手によって殺された。……

サタンに支配されたサウルには、こうしたことができたのである。アマレク人の罪悪が満ちて、神が彼らを全滅させるように命令されたときに、サウルは彼らをあわれんで神の命令に従わず、滅ぼすべきものを残しておいた。しかし、今度、神の命令ではなく、サタンに支配されていたときには、主の祭司たちを殺し、ノブの住民を全滅させることができたのである。神の指導を拒む人間の心は、このように邪悪なのである。(人類のあけぼの下巻 337,338)

釣り合わない二人

「あでやかさは偽りであり、美しさはつかのままである、しかし主を恐れる女はほめたたえられる。」(箴言 31:30)

わたしたちは、ナバルの妻アビガイルの品性において、キリストの命令に従う女らしさの実例を見る。一方彼女の夫は、サタンの支配に身を任せる者がどうなるかを例証している。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホバート・コメント] 2巻 1022)

ダビデがサウルから逃げていた時、ナバルの所有地の近くに野営をしており、この人の羊の群れや羊飼いを守ってやった。……窮乏に際して、ダビデは自分自身と家来のための食物を求めて、礼儀正しいメッセージを持たせて、ナバルの所へ使者を送った。しかしナバルは横柄に悪をもって善に報い、自分の豊かな食物を隣人と分けあうことを拒む返事をした。ダビデがこの人に送った以上に丁寧なメッセージはなかったのであるが、ナバルは利己心から自分自身を正当化するためにダビデとその家来たちをもっともらしく非難して、ダビデと彼につき従う者たちを逃亡した奴隷と表現した。使いの者がこの傲慢なのしりを帰って伝えた時、ダビデは憤慨し、すぐに復讐する決心をした。ナバルの、のしりのために悪い結果が生じるのを恐れた雇人の若者の一人が、ナバルの妻のところへ来て、この婦人が夫とは異なった精神の持主であり、非常に思慮分別があることを知っていたので、ことの次第を報告した。……

アビガイルは、ナバルの落ち度による結果を避けるために何かしなければならぬことと、夫の勧告抜きですばやく行動しなければならないことを悟った。彼女は夫に話すのは無駄であることを知っていた。彼は妻の計画に暴言と侮辱で応じるだけだからであった。ナバルは自分は一家の主人であって、アビガイルは妻であるから自分に服従し、自分が命令することを実行しなければならないことを気づかせたいと思っていた。……

夫の同意なしに、アビガイルはダビデの憤りを静めるために最善と思える食糧を寄せ集めた。なぜならダビデが自分の受けたのしりに対して復讐する決心をしていることを知っていたからである。……このことについてアビガイルの取った行動は神が是認されたことであり、状況は彼女に高貴な精神と品性があることを表していた。(原稿 17, 1891 年)

6月12日

優しい譴責

「どうぞ、はしためのとがを許してください。主は必ずわが君のために確かな家を造られるでしょう。わが君が主のいくさを戦い、またこの世に生きながらえられる間、あなたのうちに悪いことが見いだされないからです。」(サムエル記上 25:28)

アビガイルはダビデに礼を尽くし尊敬を示しながら敬意を表しつつ会い、雄弁にまた首尾よく自分の立場を嘆願した。夫の暴言を言い訳しないで、なお彼の助命を請うた。彼女はまた思慮分別があるだけでなく、ダビデの内に神のみ業と方法を知らせた信心深い婦人であるという事実を表した。彼女はダビデが主の油注がれた者であるという事実には堅い信仰を明言した。(原稿 17, 1891 年)

アビガイルは、暗に、ダビデがどういう道を進むべきであるかを示した。彼は、主のいくさを戦うべきであった。彼は身に危害を加えられ、裏切り者として迫害されても、報復をしようとしてはならなかった。……

こうした言葉は、天からの知恵を受けた者だけが語ることのできるものである。アビガイルの敬神の念は、花のかおりのように、顔や言葉や行動に、無意識のうちにただよっていた。神のみ子の霊が、彼女の心に宿っていた。彼女の言葉は、恵みによって味つけられ、好意と平和に満ち、天の感化を及ぼしていた。ダビデは、われに返り、自分の早まった考えがどんな結果をもたらすものであったかを思って戦慄した。……

献身したクリスチャンの生活は、常に光と慰安と平安を放っている。それは、純潔、気転、単純、有用性などの特性を持っている。それは、感化力を清める無我の愛に支配されている。それは、キリストに満ち満ちていてその人が行くところは、どこにでも、光の足跡を残すのである。アビガイルは、賢明な譴責者であり、勧告者であった。ダビデの怒りは、彼女の感化と道理になかった話しぶりによっておさまった。……

彼は、へりくだって譴責を受け入れた。彼女が彼に正しい勧告を与えたために、彼は感謝して祝福した。譴責される場合に、腹を立てずに譴責を受け入れるならば、賞賛に値すると考えている人が多い。しかし、自分を誤った道から救おうとした人に、感謝と祝福の気持ちを持ってその譴責を受け入れる人はなんと少ないことであろう。(人類のあけぼの下巻 350, 351)

神の復讐

「愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、『主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する』と書いてあるからである。」(ローマ 12:19)

ナバルはダビデと家来たちの必要には応じなかったけれども、その夜、自分と放埒(ほうらつ)な友人たちのために贅沢な宴会を開いて、酔い、意識混濁になるまで飲み食いほしいままにした。(原稿 17, 1891年)

ナバルは放縦と自らの榮譽のために莫大な富を費やすことは気にしなかったが、彼にとってそれほどでもない出費を、彼の大家族にとって城壁のようであった人々に与えるのは、あまりにも痛い犠牲のように思われた。ナバルは、譬え話の金持ちのようであった。彼はただ一つのことしか考えなかった。それは、神の情け深い贈り物を自分本位の動物的欲望を満たすために用いることであった。彼は与え主に感謝することを考えなかった。彼は、神に対して富んではいなかったのだ。永遠の宝は、彼にとって何の魅力もなかったからである。現在のぜいたくと利得が、彼の関心をそそる人生のテーマであった。これが彼の神であった。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コメント] 2巻 1021, 1022)

ナバルは臆病者であった。そして、彼が自分の愚かな行為によって、突然の死が、どんなに迫っていたかを悟ったとき、彼のからだはまひしたようになった。彼は、ダビデがまだ、彼に報復しようとしているのではないかと恐れて、人事不省に陥った。彼は、十日後に死んだ。神が彼にお与えになった生命は、世をのろうだけのものであった。彼が、喜び楽しんでいた最中に、主がたとえの中の間金持ちに言われたのと同じように、神は彼に言われた。「あなたの魂は今夜のうちに、も取り去られるであろう」(ルカ 12:20)。(人類のあけぼの下巻 351)

ナバルの死の知らせをダビデが聞いたとき、神がご自分の手で復讐されたことに対し、感謝の祈りを捧げた。彼は悪行を抑止され、主は悪人の悪を彼自身の頭上に戻された。ナバルとダビデに対する神の扱いの内に、人々は、神の御手に自分たちの実状を置くよう励まされるだろう。神ご自身がよしとなさる時に、物事を正しい状態にされるからである。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コメント] 2巻 1022)

6月14日

神からの答えはない

「主は夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても彼に答えられなかった。」
(サムエル記上 28:6)

主は、真心からへりくだって、主のもとに来る魂を退けられることはない。主は、なぜサウルに返答を与えず、退けられたのであろうか。それは王が、彼自身の行為によって、神に問うことができるあらゆる方法の特典に浴されなくなったからであった。彼は、サムエルの勧告を拒否した。彼は、神が選ばれたダビデを追放した。彼は、主の預言者たちを殺した。……彼は、罪を犯して、恵みの霊を去らせてしまった。彼は、夢または主の幻によって答えを得ることができようか。サウルは、へりくだって悔い改め、神に立ち帰らなかつた。彼が求めたのは、罪の許しや神との和解ではなくて、敵からの救済であった。彼は、自分自身の強情と反逆によって、神から切り離された。ざんげと悔い改めによる以外に、彼が立ち帰る道はなかつた。しかし、高慢な王は、苦悶と絶望のうちに、他に助けを求めることにしたのである。……エンドルに、ひとりの口寄せの女がひそかに住んでいることが王に伝えられた。……サウルは変装して、ふたりの従者とともに、夜、口寄せの女の隠れ家を捜した。……

自己という最悪の暴君の支配に屈した者の束縛ほど恐ろしい束縛があろうか。サウルがイスラエルの王であり得る唯一の条件は、神を信頼し、神のみこころに服従することであった。彼がその治世を通じて、この条件に応じていたならば彼の王国は安泰を保ったことであろう。神が彼を指導し、全能者が彼の盾となられたことであろう。神は、サウルを長く忍ばれた。そして彼は、反逆と頑強さによって彼の魂のうちの神の声をほとんど沈黙させてしまったとはいえ、まだ悔い改める機会は残されていた。しかし彼が、この危機において神から離れ、サタンの共謀者からの光を得ようとしたときに、彼は、創造者との最後のきずなを切ってしまったのである。……

暗黒の霊に問うことによって、自分を滅ぼした。絶望の恐怖に苦悩する彼は、軍勢を勇気づけることができなかつた。彼は、力の源である神から離れたので、神をイスラエルの援助者として仰ぐように人々の心を導くことはできなかつた。こうして、不吉な予告は実現されるのであつた。(人類のあけぼの下巻 359-365)

サムエルではない

「生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事がらさえも、ついに忘れられる。」(伝道の書 9:5)

サウルがサムエルとの面会を求めたとき、主はサムエルをサウルの前に出現させられなかった。サウルは何も見なかった。墓にいるサムエルの休息を妨害し、現実にエンドルの口寄せの所へ彼を連れてくることは、サタンには許されていなかった。神は死人をよみがえらせる力をサタンに与えておられない。しかし、サタンの使らが、死んだ友人たちの姿を装って彼らのように語り、行動する。死去した友人たちと称する者を通して、彼は欺瞞の働きをよりうまく進めることができる。サタンはサムエルを良く知っていて、エンドルの口寄せの前で彼を演じ、サウルとその息子たちの運命を語る方法を知っていた。

サタンは、彼が欺くことのできるような者たちのところに極めてもつもらしい方法で入ってきて、巧みに彼らの好意を得、ほとんど気づかれずに彼らを神から引き離すであろう。最初は慎重に、彼らの知覚が鈍くなってしまいうまで、彼らをうまく自分の支配下に置く。それから、徐々に大胆な提案をし、ついにはいかなる程度の罪でも犯すように誘導することができるようになる。彼らを完全に自分の罠へと導いたら、彼らが自分たちのいるところを、その時、初めて悟るようにさせ、サウルを欺いたときのように、混乱に陥った彼らに狂喜する。サウルは自ら進んで、サタンが自分を虜にするのを許し、今になってサタンは、目の前で彼の運命を正しく描いてみせる。エンドルの女を通して、サウルの最期について正しく伝えることによって、イスラエルがサタンの悪魔的狡猾さによる通告を受ける道を開く。イスラエルが神に反逆した状態の中で彼について学び、こうすることによって、彼らを神のもとに留め得た最後の絆を断ち切らせるためである。

エンドルの魔術師にこの最後の相談をしている最中、サウルは自分を神のもとに引き留めていた最後の糸を断ち切ったということを知った。以前は、意図的に神から離れてはいなかったとしても、この行為はその別離を決定的、かつ最終的なものにしたのであった。サウルは地獄と協定を結び、死と契約を結んだ。彼の罪の杯は満たされた。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホワイト・コメント] 2巻 1022, 1023)

6月16日

神の秘密

「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。」(使徒行伝 1:7)

エンドルの口寄せは、すべての事柄においてサタンの指示に従うという協定を結んでいたのだから、サタンは彼女のために不思議と奇跡を行い、もし彼女が、彼の悪魔的主権による支配に全く身を任せるならば、究極の秘密を彼女に示そうとした。彼女はこれをしたのであった。(SDA パイブルマンター [E・G・ホイト・コメント] 2巻 1022)

サタンはエンドルの女によって、サウルの運命を予告し、イスラエルの人々を陥れようとした。サタンは彼らが、口寄せの女を信頼して、彼女に問うてくるようになることを望んだ。こうして、彼らは、神を彼らの助言者とせず、サタンの指導のもとに陥ってしまうのであった。心霊術が多くの人々を引きつける魅力を持っているのは、将来の幕を開いて神が隠されたものを、人間に示す力があると主張するからである。神は、われわれが知らなければならない将来の大事件を皆、み言葉の中に示しておられる。そして、あらゆる危険の中にあつてわれわれの足を導く安全な道標をお与えになった。しかし、サタンは、神に対する人間の信頼を失わせ、この世において彼らが置かれた境遇に不満をいだかせる。また、神が知恵のうちに隠されたことを知ろうと思わせ、聖なるみ言葉の中に神が啓示されたことを軽べつするようにさせる。

事態の明白な結果を知ることができなければ、落ちつかない人々が多くいる。彼らは、不安定に耐えられない。そして、忍耐しきれないで、神の救いを見るのを待とうとしない。彼らは、災いを恐れて、狂気のようになる。彼らは、反逆的精神をいだいて、啓示されていないことを知ろうと求めて、悲嘆にくれ、あちらこちらを奔走する。もし彼らが神に信頼して、目をさまして祈っているならば、彼らは神の慰めを得ることができるであろう。彼らの心は、神との交わりによって、平安が与えられる。重荷を負うて苦勞している者は、イエスのもとに行きさえすれば休みが与えられる。しかし、神が彼らの慰めのためにお定めになった方法を無視して、神が隠されたことを知ろうとして、ほかのところへ行くとすれば、彼らは、サウルと同じあやまちを犯し、それによって得るのは、ただ悪の知識だけである。(人類のあけぼの下巻 371-373)

自殺

「誠実な者は、その正義によって、その道をまっすぐにせられ、悪しき者は、その悪によって倒れる。」(箴言 11:5)

サタンの指示に従うことにより、サウルは、清められていない能力でもって回避しようと努めていたまさにその結末へと自ら急いでいたのである。

反逆の精神に満ちた王によって、主の勧告は何度も繰り返し無視され、主は彼が、自分自身の知恵という愚かさへと赴くままに任せられた。神の御霊の感化は、彼が自ら選び、ついに破滅へと至らせた悪の道に彼が向かうのを抑制するはずであった。神はすべての罪を憎まれるので、人が執拗に天の勧告をことごとく拒むとき、彼は敵の欺瞞の中に取り残されて、自らの欲情へと引きつけられ、そそのかされるのである。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コメント] 2 巻 1019)

イスラエル初代の王は失格者であることを立証した。なぜなら、彼は自らの意志を神の意志の上に置いたからである。主は預言者サムエルを通して、サウルの行動方針は、イスラエルの王として極めて厳格な程に高潔でなければならないことを教えられた。それから神は、彼の統治を繁栄させ、祝福なざるおつもりであった。ところがサウルは、神への服従を第一に考え、天の原則に行動を支配させることを拒んだ。彼は不名誉と絶望の内に死んだ。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コメント] 2 巻 1017)

シュネムの平原とギルボア山の山腹で、イスラエルの軍勢とペリシテ人の軍勢は、決死の戦闘に従事した。サウルは、エンドルのほら穴の恐るべき光景によって、絶望状態に陥っていたのであるが、王位と王国の擁護のために、必死で戦った。しかし、それはむだであった。「イスラエルの人々はペリシテびとの前から逃げ、多くの者は傷ついてギルボア山にたおれた」。王の勇敢な三人のむすこたちは、王のかたわらで倒れた。弓を射る者どもがサウルに迫った。彼は、彼の軍勢が回りで倒れ、王子たちが剣で殺されるのを見た。彼自身も負傷して、戦うことも逃げることもできなかった。逃亡は不可能であった。彼は、ペリシテ人に捕われまいとして、武器をとる者に言った。「つるぎを抜き、それをもってわたしを刺せ」。しかし、その人は主に油を注がれた者に手をふりあげることを拒んだので、サウルはつるぎをとり、その上に伏して自害した。こうして、イスラエルの最初の王は、自殺の罪を犯して死んだ。(人類のあけぼの下巻 365)

6月18日

悲しむ友人

「ああ、勇士たちは倒れた。戦いの器はうせた。」(サムエル記下 1:27)

ダビデは、サウルを二度も自分の手の中に入れ、彼を殺すように勧められたけれども、イスラエルを支配するために神の命によって聖別された者に、手をふり上げることを拒んだのであった。……ダビデは、サウル之死を心から深く悲しんだ。それは、ダビデの気高い心の広さをあらわしていた。彼は、敵が倒れたことを喜ばなかった。彼がイスラエルの王座につく障害は除かれたけれども、彼はこれをうれしく思わなかった。サウルの不信と残酷さの記憶は、死によって消去られて、気高い王者としての彼の記憶のほかは、何も心に浮かばなかった。サウルの名は、真実で無我の友情の持ち主であったヨナタンの名と結び合わされた。(人類のあけぼの下巻 384,385)

生まれながらにして王位の継承者であったヨナタンは、神のご命令によって自分が退けられたことを知りながら、競争者に対して友としての愛情と忠誠を示し、自ら生命の危険を冒してまでダビデの生命をかばい、父の勢力が衰えてゆく暗い時代にも父のそばからはなれず、ついには父と運命を共にしたのであった。ヨナタンの名は天にとどめられるとともに、地にあっては、無我の愛の存在と力を実証している。(教育 177)

ダビデが、彼の気持ちを表現した歌は、彼の国の宝となり、その後の各時代の神の民の宝となった。……

ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。ヨナタンは、あなたの高き所で殺された。わが兄弟ヨナタンよ、あなたのためわたしは悲しむ。あなたはわたしにとって、いとも楽しい者であった。あなたがわたしを愛するのは世の常のようではなく、女の愛にもまさっていた。ああ、勇士たちは倒れた。戦いの器はうせた。(人類のあけぼの下巻 385, 386)

ウザの最後の過ち

「彼らがナコンの打ち場にきた時、ウザは神の箱に手を伸べて、それを押えた。牛がつかずいたからである。すると主はウザに向かって怒りを発し、彼が手を箱に伸べたので、彼をその場で撃たれた。彼は神の箱のかたわらで死んだ。」(サムエル記下 6:6, 7)

ウザの死は、明白な命令にそむいた罰であった。主は、モーセによって、箱を運ぶときの特別な指示を与えておられた。アロンの子孫の祭司以外は、それに触れることも、おおいをかけずに見ることさえできなかった。……

祭司が箱におおいをかけ、そのあとでコハテ人が、箱の両側の環に通して固定されたさおを持って持ち上げなければならなかった。モーセは、幕屋の幕と板と柱の責任を負わせられたゲルシヨンの子たちとメラリの子たちには、ゆだねられたものを運ぶために牛車を与えた。「しかし、コハテの子たちには、何をも渡さなかった。彼らの務は聖なる物を、肩になって運ぶことであったからである」(民数記 7:9)。したがって、彼らがキリアテ・ヤリムから箱を移動した場合、主の指示に対して直接、許すことのできない違反を犯したのであった。……

ペリシテ人は、神の律法を知らなかったから、箱をイスラエルに返すときに車に載せた。そして、主は、彼らの努力をお受け入れになった。しかし、イスラエル人は、彼らの手中に、これらすべてのことに関する神のみむねを明らかにしたものを持っていた。そして、これらの指示をなおざりにすることは、神のみ栄えを汚すことであった。ウザは僭越というさらに大きな罪を犯した。彼は神の律法を犯して、その神聖さを自覚しなくなり、告白しない罪をいただいたまま、神が禁じておられるにもかかわらず、神の臨在の象徴にあえて触れようとした。神は、部分的服従や神の戒めをあいまいに取り扱うことをお受け入れにならない。神は、ウザを罰することによって、神の要求に厳密な注意を払う重要性を、全イスラエルに印象づけようとした。こうして、ひとりの人間の死によって、人々が悔い改めるようになり、幾千の人々を罰する必要があるようにするのであった。(人類のあけぼの下巻 400, 401)

6月20日

サタンのひそかな働き

「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。」(エペソ 6:12)

聖書には、人間を賞賛する言葉がほとんどない。この世に生存した最も善良な人々の美德でさえ、聖書にあまり書かれていないのである。この沈黙は無意味ではない。そこに教訓が隠されている。人間が持っている美点は皆、神の賜物である。彼らの善行は、キリストを通して与えられた神の恵みによって行なわれた。彼らは、すべてを神に負うているのであるから、彼らがどんな人間で、どんな行為をしようとその誉れは神にだけ帰すべきである。彼らは、ただ、み手の中の器に過ぎないのである。そればかりではない。聖書歴史のすべての教訓が教えているように、人間を賞賛し、高めることは危険である。なぜなら、人間が、神に全く依存していることを見失い、自分自身の力にたよるようになると、彼は必ず墮落するからである。……

われわれは、自分の力で戦い続けることはできない。そして、心を神からそらし、自己高揚と自己依存に陥れるものは何であっても、必ず、われわれを敗北させるものである。聖書は、人間の能力にたよらず、神の力にたよることを奨励するのをその主題としている。ダビデを墮落させたのは、自己過信と自己高揚の精神であった。甘言、陰險な権力の誘惑、ぜいたくなどが、彼に影響を与えずにはおかなかった。回りの国々との交際もまた悪影響を及ぼした。東方の諸王の間の習慣に従って、国民の間では許されない犯罪が王には許された。王には、国民と同様の自制をする義務がなかったのである。こうしたことは、すべて、罪が、はなはだしく憎むべきものであることを、ダビデに感じさせなくしたのである。そして、彼は心を低くして主の力にたよる代わりに、自分自身の知恵と力にたよりはじめた。

サタンは、唯一の力の源である神から魂を引き離すとすぐに、人間の肉の心の汚れた欲望を起こさせようとする。敵の働きは、急激ではない。それは、最初は、突然でも驚くほどのものでもない。それは、原則の城塞をひそかにくつがえすことである。(人類のあけぼの下巻 414, 415)

一つの罪は他の罪へと導く

「ダビデがしたこの事は主を怒らせた。」(サムエル記下 11:27)

落ちついて、自己の安全が確保されたときに、彼は神を手放した。ダビデはサタンに敗れて、魂に罪の汚点をつけた。国家の指導者とし神の命を受け、神の律法を施行するために神に選ばれた彼自身が、その戒めをふみにじった。悪人を恐れさせるべきであった者が、自分自身の行為によって、悪を勧めたのである。

ダビデは若いころ、危険のまっただ中であつたとき、自分の潔白を意識して、自分のことを神にゆだねることができた。主の手は、彼の足をつまずかせようとしておかれた無数のわなの間を導いて、無事に通らせてくださった。しかし、彼は、今、罪を犯しても悔い改めず、天の神の助けも導きも求めずに、罪のために陥つた危険から、自分で脱出しようとしたのである。王を罪に陥れた美しい女バテシバは、ダビデの最も忠勇な將軍のひとりヘテ人ウリヤの妻であつた。もし、犯罪が明るみに出たら、どういうことになるかは、だれにも予測できなかつた。……

罪を隠そうとするあらゆる努力は、すべてむだに終わった。……彼は絶望のあまり、急いで姦淫に殺人の罪を加えたのである。サウルの滅びを企てた者が、ダビデをも滅ぼそうとしていた。誘惑は異なっていたが、それらは、ともに神の律法を犯させるものであつた。……

ウリヤは、自分自身の死の命令書を持って送り出された。彼によって王からヨアブへ送られた手紙は、こう命じていた。「あなたがたはウリヤを激しい戦いの最前線に出し、彼の後から退いて、彼を討死させよ。ヨアブは、すでに非道な殺人の罪を一つ犯していたので、王の命令に従うことをためらわなかつた。こうして、ウリヤはアンモン人の手によって倒れた。……

自分の生命が危機にひんしたときさえ、主が油を注がれた者に手を下さなかつたほどに敏感な良心と強い榮譽尊重の心をもっていたダビデが、彼の最も忠実で勇敢な軍人のひとりに対して悪事を行なつて殺害し、罪によって手にしたものを、ひそかに楽しもうとするまでに墮落したのである。ああ、精金はなんと曇つたことであろう。最も純粋な金は、なんと変化したことであろう。(人類のあけぼの下巻 415-418)

6月22日

譴責された王

「ナタンはダビデに言った、『あなたがその人です。』」(サムエル記下 12:7)

時の経過につれて、バテシバに対して行なったダビデの罪が明るみに出て、彼がウリヤの死を計画したのではないかという疑惑が起こった。主のみ栄えが汚された。

主は、ダビデを恵み、高められた。ところがダビデの罪は、神の品性を誤表し神のみ名をはずかしめた。それは、イスラエルにおける敬神の念の標準を下げ、多くの人々の心の中の罪に対する嫌悪感を低下させるものであった。他方では、神を愛することも恐れることもしない人々は、それによって、大胆に罪を犯すのであった。

預言者ナタンが、ダビデに譴責の言葉を伝えるように命じられた。それは、恐ろしくきびしい言葉であった。たいていの王は、このような譴責を受ければ、譴責者を死刑に処することは確実であろう。ナタンは、神の言葉をひるまず伝えたが、それを天から授かった知恵によって語り、王の共感を呼び、良心を覚醒させ、彼自身のくちびるから、自分に死の宣告を下させたのである。……

悪人は、ダビデのように、人間から犯罪を隠そうとする。彼らは、悪い行為を人間の目と記憶から永久に葬り去ろうとする。しかし、「すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされているのである。この神に対して、わたしたちは言い開きをしなくてはならない」。(人類のあけぼの下巻 418-420)

ダビデ王に与えられた預言者ナタンのたとえ話は、すべての人が研究すべきである。……彼が放縦と戒めの違反という道を進んでいる時に、貧しい人から一頭の小羊を奪った富める人のたとえ話が指示された。ところが王は、罪の衣に完全に包まれていたので、彼がその罪人であることを悟らなかった。彼はわなに陥って……自分では別の人だろうと想像していた者に、死の宣告を下した。……

ダビデにとって、これは最も辛い経験であったが、最も有益でもあった。しかし、彼に自分自身の姿をはっきりと認めさせた鏡を、ナタンが彼の面前に掲げなければ、彼は忌まわしい罪を自覚することなく、破滅に至ったことだろう。罪の自覚が彼の魂の救いとなった。彼は、主が彼をご覧になった角度から自分自身を見た。そして生きている限り、自らの罪を悔いたのであった。(SDA バイブルメモリー [E・G・ホイト・コマン] 2巻 1023)

罪の道は大変な道である

「あなたはこの行いによって、おおいに主の敵に主を冒瀆する機会を与えたので」
(サムエル記下 12:14 欽定訳)

各時代を通じて無神論者たちは、この暗いしみをもつダビデの品性を指摘し、勝ち誇るとともにちよう笑して、「これが神の心になつた人だ」と叫んだ。こうして、宗教が恥辱をこうむり、神と神の言葉が冒瀆された。人々は、神を信じようとせず、多くの者は、敬虔なよそおいの陰で大胆に罪を犯すようになったのである。

しかし、ダビデの生涯は、罪を犯すことを勧めてはいない。彼が、神のみこころになつた人だと言われたのは、彼が神の指示に従って歩んでいたときのことであつた。彼が罪を犯したときに、悔い改めて、主に立ち返るまでは、そうではなかつたのである。……

ダビデは罪を悔い改めて許され、主に受け入れられたのではあつたが、彼は、自分自身がまいた種の痛ましい実を刈り取つたのである。……彼自身の家の中の彼の権威と、むすこたちに尊敬と服従を要求する彼の力とは弱まつた。彼は、罪を責めるべきときにも、自己の罪悪感のために、沈黙を守つた。これは、彼の腕を弱めて、彼の家の中で正義を行なうことを不可能にした。……

ダビデの例を引用して、自己の罪のとがを軽減しようと試みるものは、不真実な者の道は滅びであることを聖書から学ばなければならない。彼らも、ダビデのように悪の道から立ち直つても、罪の結果はこの世においてさえ、苦く耐えがたいものであることを知るであらう。(人類のあけぼの下巻 423, 424)

人は人を傷つけることで罪に問われるのだが、最も大きな罪は彼が主に対して罪を犯したこと、そしてその例によって他の人に悪い影響を及ぼしたことである。まじめな神の子は、神のご要求をいささかも軽んじたりはしない。(SDA バイブルモニター [E・G・ホイト・コマン] 3巻 1147)

ダビデの生涯は、神に大いに祝福され、恵まれた者でさえも、自分は安全であると思つたり、目をさまして祈ることを怠つたりすべきでないことを警告するためのものであつた。こうして、これは心を低くして、神が教えようとされた教訓を学ぼうと努める者たちに対する警告となつたのである。(人類のあけぼの下巻 424)

6月24日

表面的な美

「しかし主よ、あなたはわたしを囲む盾、わが榮え、わたしの頭を、もたげてくださるかたです。」(詩篇 3:3)

ダビデは、自分自身が神の律法を犯したことを、深く脳裏に刻まれていたために、道徳的まひ状態に陥ったものと思われる。彼は、罪を犯す以前は、勇敢で決断力に富んでいたのに、今は弱く、優柔不断になっていた。彼の人々に及ぼす影響も弱まった。そして、こうしたことは、すべて親不孝な王子の策動に有利であった。……

王は、次第に人を避け、孤独を好むようになる一方においてアブサロムはなんとかして人心を獲得しようと努めた。……

この気高い容貌の男は、毎日、多くの嘆願者たちが、苦情の解決を求めて群がる町の門に姿を現わした。アブサロムは、彼らの中に混じって、彼らの苦情を聞き、彼らの苦難に同情し、政府の無能を嘆いた。(人類のあけぼの下巻 434, 435)

彼の際立った美しさと人を魅きつける方法またうわべの親切によって、アブサロムは人々の心を奪った。彼は心に慈悲を持つてはおらず、野心的であり、その方針が示していたように、王国を得るために陰謀と恥ずべき行為に頼った。彼は父の愛と親切に対してその生命を取ることによって応じた。アブサロムはヘブロンで自分に付き従う人々によって王であると宣言され、自分の父親を彼らに追跡させた。(霊的賜物 a89)

ダビデは、恥辱と悲しみのうちに、エルサレムの門を出た。彼は、愛した王子の謀叛によって、王位と王宮と神の箱とから追われているのであった。(人類のあけぼの下巻 437)

神が見られるようには見ないで、人間の見地から物事を見る多くの者はダビデが不満を抱くことに対する言い訳として、何年も前の誠実な悔い改めによって現在の審判を逃れることができると考えるであろう。……ダビデはつぶやきを口にしない。彼が歌った中でも最も感銘を与える詩篇はオリブ山を泣きながら、はだして登って行き、なおかつへりくだって無我と寛容と従順のうちに甘んじて従う精神を持っていた時のものであった。(手紙 6, 1880 年)

へりくだりのうちにある偉大さ

「わたしが暗やみの中にすわるとも、主はわが光となら主はわが訴えを取りあげ、わたしのためにさばきを行われるまで、わたしは主の怒りを負わなければならない。」(ミカ 7:8, 9)

ダビデは、激しく良心に責められ、恥じ入るばかりであった。彼の忠実な家来たちは、彼の突然の不運を不思議に思ったけれども、それは王にとって、何の不思議でもなかった。彼は、こうしたことの起こる予感がときどきあったのである。彼は、神が彼の罪を長く忍び、彼が当然受けるべき報いを延ばされたのを怪しんだのである。そして、今、急いで、悲しみのうちにはだして、王衣の代わりに荒布をまとして町からのがれ、家来たちの嘆きの声が出た山々にこたましているときに、彼は、彼の愛する都のことを考えた。そして、そこは、彼が罪を犯した場所でもあったが、彼は、神の恵みと忍耐を思い起こして、希望が全然ないわけではないと考えるのであった。……

ダビデが墮落したことを引用して、自分の罪の言い訳をする悪者たちが多い。しかし、ダビデのような悔い改めとけんそんを表わすものがなんと少ないことであろう。彼が表わしたような忍耐と堅忍不拔の精神をもって譴責と刑罰に耐える者は、なんと少ないことであろう。彼は、自分の罪を告白したのであった。そして、長年神の忠実なしもべとしての務めをしようと努めてきた。彼は、王国の建設のために活躍し、彼の治世のもとに王国は、これまでになかったほどの勢力を得て繁栄したのであった。彼は、神の家の建設のために豊富な資材を集めたのであったが、今、彼の一生の努力が水泡に帰してしまうのであろうか。長年の献身的努力の結果、天才と献身と政治的手腕をもってなした業績などが、神の栄光もイスラエルの繁栄も考えない無鉄砲な反逆児の手に渡ってしまわねばならぬのであろうか。こうした大きな苦難の中で、ダビデが神に向かってつぶやいても、当然のこのように思われる。

しかし、ダビデは彼の苦難の原因が、自分の罪にあることを認めた。……主は、ダビデをお捨てにならなかった。ダビデは、残酷きまわる取り扱いとちょう笑の中で、けんそん、無我、寛大、服従を示したのである。この経験は、彼の一生の経験の中で、最も高貴なものの一つであった。イスラエルの王が、一見、屈辱のどん底に沈んだこのときほど、彼が天の神の前に偉大であったことはなかった。(人類のあけぼの下巻 442-444)

6月26日

愚かな知者

「主がアブサロムに災を下そうとして、アヒトペルの良い計りごとを破ることを定められたからである。」(サムエル記下 17:14)

アヒトペルは、まず、自己の安全を確保する計画が成功を取めたので、すぐにダビデに対抗して行動する必要をアブサロムに勧告した。……この計画は、王の議官たちに承認された。もし、この通りに行なわれたならば、主がダビデを助けるために直接介入なさらないかぎり、彼は殺されてしまったことであろう。しかし、名声高いアヒトペル以上に知恵のあるおかたが、事件を導いておられた。……

ホシャイは、会議に呼ばれていなかった。彼は、スパイだと疑われてはいけなから、求められもしないのに顔を出すことをしなかった。しかし、父の議官の判断を尊重していたアブサロムは、会議のあとでアヒトペルの計画を彼に話した。ホシャイは、その提案が実行されるならば、ダビデは敗北してしまうことを認めた。それで彼は言った。「『このたびアヒトペルが授けた計りごとは良くありません』……ホシャイは、彼の虚栄と利己心と誇示愛好心に訴える計画を提案した。……「アブサロムとイスラエルの人々はみな、『アルキビとホシャイの計りごとは、アヒトペルの計りごとよりもよい』と言った」(サムエル記下 17:14)。しかし、これに欺かれないものが、ひとりいた。彼は、アブサロムのこの計画が致命的誤りで、ついにどうなるかをはっきりと予想した。アヒトペルは、反逆の企てが失敗に終わったのを知った。そして彼は、王子の運命がどうなろうと、王子に最大の犯罪を犯すようにそそのかした議官には、助かる望みがないことを悟った。アヒトペルは、アブサロムに反逆を勧めたのであった。彼は、王子に最も憎むべき罪を犯して、父をはずかしめるように勧めたのであった。彼は、ダビデを殺すように助言して、その計画を実行しようとしていた。彼は、自分自身が王と和解する最後の可能性を断ち切ったのであった。ところが、今、アブサロムさえ、彼を捨てて他の者を選んだのであった。アヒトペルは、しっとと怒りと絶望のうちに、「立って自分の町に行き、その家に帰った。そして家の人に遺言してみずからくびれて死」んだ(同 17:23)。豊かな才能に恵まれていながら、神の勧告に従わなかった者の知恵は、こうした結果に終わったのである。(人類のあけぼの下巻 446-448)

石の記念碑

「人々はアブサロムを取って、森の中の大きな穴に投げ入れ、その上にひじょうに大きい石塚を積み上げた。」(サムエル記下 18:17)

ダビデと彼の一団、すなわち、軍人たちや政治家たち、老人も青年も、女子も小さい子供たちも、皆、暗い夜のうちに深い急流を渡った。……

ホシャイの勧告は、ダビデに逃亡の機会を与えて、その目的を達した。しかし、向こう見ずで血気にはやった王子を長くとめておくことはできなかった。間もなく、彼は、父のあとを追った。……

戦場は、ヨルダン川の近くの森であった。アブサロムの大軍も、ここでは、ただ邪魔になるだけであった。この訓練のない軍隊は、森の茂みや沼地で混乱し、統制がとれなくなった。……アブサロムは、戦いに敗れたのを知って逃げようとしたところ、彼の頭が茂った木の枝にひっかかってラバは彼の下を通りぬけて行ってしまった。彼は宙づりになってどうすることもできず、敵のいいえじきになった。ひとりの兵隊が、こういう状態の彼を見つけたが、王を悲しませることを恐れて、王子に害を加えず、彼を見たことをヨアブに報告した。ヨアブは、なんのためらいも感じなかった。彼は、アブサロムを助け、二度もダビデとの和解を成立させたのであったが、彼の信頼は、無暴にも裏切られてしまった。ヨアブの仲介によって得た有利な地位がアブサロムになかったならば、この恐ろしい反逆は起こり得なかったのである。今ヨアブは、こうしたすべての災いの張本人を一撃のもとに倒すことができるのであった。……「そこで、ヨアブは……手に三筋の投げやりを取り……アブサロムの心臓にこれを突き通した。……

こうして、イスラエルの反逆の扇動者たちは倒れた。アヒトペルは自害していた。イスラエルが誇った美しい容貌の王子アブサロムは、若い盛りに倒されて、その死体は穴に投げ込まれ、石塚でおおわれて永遠の恥辱のしるしとなった。アブサロムは、生きていたころ、自分のために王の谷に高価な記念碑を建てたが、彼の墓の唯一の記念は、荒野の中の石塚であった。(人類のあけぼの下巻 450-453)

6月28日

金銭よりも

「彼らがこのように真心からみずから進んで主にささげたので、民はそのみずから進んでささげたのを喜んだ。」(歴代志上 29:9)

ダビデは、その治世の最初から、主の神殿を建築することを彼の念願の一つにしていた。彼は、この計画を実行することが許されなかったけれども、そのために非常な熱心と誠意を示した。彼は、金、銀、しまめのう、色のついた石、大理石、貴重な材木など、高価な材料を多量に準備した。彼は、こうした貴重な材料を人の手にゆだねなければならなかった。神の臨在の象徴である箱のために、他の者が家を建てなければならなかった。王は、自分の最後の時が近いのを知って、イスラエルの長官たち、王国の各地からの代表者たちを集めて、この遺産を委託することにした。彼は、彼の遺言を彼らに伝えて、大いなる事業の完成のために、彼らの賛同と支持を得たいと望んだ。……

「だれかきょう、主にその身をささげる者のように喜んでささげ物をするだろうか」と、多くのささげ物を持って、集会に集まった群衆に彼はたずねた。……

群衆は、すぐにそれにこたえた。……

王は、非常な関心をもって、神殿の建築と装飾のために豊富な資材を集めた。後年、神殿の庭に鳴り響くことになる荘厳な賛美歌を彼は作曲した。今、氏族の長たちやイスラエルの部族のつかさたちが、りっぱな態度で彼の訴えにこたえ、彼らの前にある重大な事業に献身したので、彼の心は、神にあって喜びに満たされた。……

人間が神の豊かなものの中から受けるものは、すべて今なお神に属する。神が地上の価値ある美しいものとしてお与えになったものは、何であつても彼らを試みるために、人間に与えられる。それは、彼らの神に対する愛と神の恵みに対する感謝をはかるためのものである。それが富であれ、あるいは知性であれ、喜んでイエスの足もとに心からのささげ物としておかれるべきである。ささげる者は、ダビデとともに、「すべての物はあなたから出ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです」と言わなければならない。(人類のあけぼの下巻 461-466)

恵みにみちて老いる

「わたしが年老いた時、わたしを見離さないでください。わたしが力衰えた時、わたしを見捨てないでください。」(詩篇 71:9)

ダビデは、年老いても見捨てないで下さいと、主に懇願した。なぜこのような祈りをしたのだろうか。彼は周囲の年老いた者たちが、年と共に増していく望ましくない性質のせいで、不幸であるのを見た。生来けちで貪欲であったとすると、彼らは年を取るほどつきあいにくくなるのであった。嫉妬深く、気難しく、短気であったとすると、年取るほどまた特にそうなるのであった。(SDA パイブルコメンタリー [E・G・柯什・コメント] 3巻 1148)

ダビデは、壮年期には神を畏れているように見えた王や貴族たちが、年老いた時に親友や親戚を嫉妬するのを見て悲しんだ。彼らは、友人が自分に関心を示すのは利己的な動機であるとたえず思っていた。彼らは、自分が信頼すべき人々に関して赤の他人の暗示や当てにならない忠告を聞きたがるのである。こういう人々の抑制のない嫉妬心は、時々皆が自分の間違った判断に同意しないからという理由で、炎となって燃えあがる。彼らのむさぼりは恐ろしいほどである。彼らはしばしば、自分自身の子供や親戚が、自分の地位を手に入れ、富を所有して、自分に与えられていた尊敬を受けるために、自分が死ねばよいと願っていると考えた。そしてある者は自分自身の子供を殺すほどに自分の嫉妬心やむさぼりの感情に強く支配されたのである。

ある者の生涯がその壮年期には正しかったのであるが年老いてきた時自制心を失っているように思えたことをダビデは記録している。サタンはそのような人々を不安にさせ、不満を抱かせつつ、彼らの思いに入り込み、また思いを導くのである。……

ダビデは深く感動を受けた。彼は自分が老いねばならない時を先に見て嘆いた。彼は、神が自分を見放して、自分がその成り行きを知っている他の年老いた人々と同じように不幸になり、主の敵の非難を受けるがままになるのではないかと恐れた。この重荷を負って、ダビデは、「わたしが年老いた時、わたしを見離さないでください。わたしが力衰えた時、わたしを見捨てないでください」と熱心に祈るのである。(教会への証 1巻 422, 423)

6月30日

最後の言葉

「これはダビデの最後の言葉である。」(サムエル記下 23:1)

記録に残っているダビデの「最後の言葉」は歌である。それは、信頼の歌、高遠な原則と不滅の信仰の歌である。

「エッサイの子ダビデの託宣、
すなわち高く挙げられた人、
ヤコブの神に油を注がれた人、
イスラエルの良き歌びとの託宣。
『主の霊はわたしによって語る、……

「人を正しく治める者、
神を恐れて、治める者は、朝の光のように、
雲のない朝に、輝きでる太陽のように、
地に若草を芽ばえさせる雨のように人に臨む」。

まことに、わが家はそのように、神と共にあるではないか。
それは、神が、よろず備わって確かなとこしえの契約をわたしと結ばれたからだ。
どうして彼はわたしの救と願いを、皆なしとげられぬことがあろうか』」(サムエル記下 23:1-5)。

ダビデは、非常に墮落はしたが、深刻に悔い改めて、心をこめて愛し、信仰を堅く保った。彼は多くの罪をゆるされたので、多く愛した(ルカ 7:47, 48 参照)。

ダビデの詩篇は、罪の自覚と自責の深淵から、最も高められた信仰と神との最も高められた交わりまでのあらゆる経験をうたっている。彼の生涯の記録は、罪がただ恥と災いだけをもたらすものであることを示している。しかし、神の愛とあわれみは、どんな深みにも達し、信仰は、悔い改める魂を引き上げて、神の子としての身にあずからせることを明らかにする。それは、神のみ言葉の中のすべての確証の中で、神の誠実と正義と神の契約のあわれみに関する最も強力なあかしの一つである。……

ダビデと彼の家に与えられた約束は輝かしく、永遠のかなたを待望し、キリストにおいて完全に実現されるものであった。(人類のあけぼの下巻 467-469)

研究 5

わたしたちが信仰の一致に到達するまで



「目的のない生き方はしない」

さて、場所の問題を理解するために、「わたしの言葉を守る」と言われたその言葉を、さらに見ていきましょう。

「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである」(黙示録 1:3)。

聖書の中で言葉を朗読する、すなわち読むとは、教えることを意味します(ネヘミヤ 8:8 参照)。つまり、「この預言の言葉を朗読する」とは、主の言われたとおりに教えることです。そして、「これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである」。つまり、「書かれている」神の言葉を、教える人も、それを心という畑の中に守る人も、さいわいであるということです。彼らは、収穫を得る時を迎えます。

そして、この言葉を守るところこそ、黙示録 14:12 で「ここに…ある」と言われた場所なのです。その言葉が守られる場所で、「神の戒めを守り、イエスの信仰を持ちつづける聖徒の忍耐」という収穫を得るようになります。そしてその言葉とは、生きた言葉そのものであられるイエスが、「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」と言われ、「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされ」た聖書全体です(ヨハネ 5:39、ルカ 24:27)。このみ言葉の種に引くことも足すこともせずそのまま大事にする場所に、イエスのご品性という収穫があります。そしてその収穫を得るために、イエスが来られます。

「各時代にわたり、各世代を通じて天の高潔な教えは教会の中で明らかにな

ってきた」(患難から栄光へ上巻 4)。

「キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである」(キリストの実物教訓 47)

「たしかに、聖霊は、全世界に行きわたり、いたるところで人びとの心に働かれるのではあるが、わたしたちが熟して、神の倉に収められるようになるのは、教会の中においてである」(キリストの実物教訓 48)。

「キリストがそうなされたのは、水で洗うことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり」、その教会を迎えに来られます(エペソ 5:26)。

心の中に守るとは

「ただ単に、みことばを聞いたり、読んだりするだけでは十分でない。みことばから恵みを受けたいと思う者は、示された真理についてよくめい想しなければならぬ。わたしたちは、細心の注意と熱心な祈りをもつて、真理のことばを深く考えつつ学び、みことばの精神を体得しなければならない」(キリストの実物教訓 37)。

瞑想とは何でしょうか。同じことが心から離れず、ずっと考え続けることがありますが、もしそれが、自分につきまとう困った問題であれば、それは瞑想ではなく、心配です。しかし、ダビデが言ったように「昼も夜も」み言葉を愛して、これを「思う」とき、つまり目的をもって考えるとき、それが瞑想です(詩篇 1:2)。

「偉大でしかも純粋な思想をもって、わたしたちの心を満たすようにせよと、神は命じておられる。神は、わたしたちが、神の愛とあわれみをめい想し、偉大な救済の計画の中にひめられた、神の驚くべきお働きを研究することを望んでおられる。そうすれば、わたしたちの真理に対する認識は、ますます明りようになっていく。そして、純潔と明快な思想に対するわたしたちの願いがますます強まってくる。清い思想をいだし、純潔なふんい気の中に宿っている魂は、聖書を研究して、神と交わることによって、変えられていくのである」(キリストの実物教訓 38)。

胃の空腹は、食物で満たします。心が空腹であるときは、寂しさを感じますが、これはみ言葉でなければ満たすことはできません。これをこの目的をなし遂げて

下さるのは神様です。

「わたしは神である、今より後もわたしは主である。わが手から救い出しうる者はない。わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう」(イザヤ 43:13)。

「そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さる」(ピリピ 1:6)。み言葉のともし火を与えてくださった方は、そのみ言葉のともし続ける油を備える働きも完成して下さいます。

「そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない」(コリント第一 9:26)。

目的のない生き方はしない

希望を持つことは幸いです。しかし、希望は、目的があるときにはじめて存在します。イエスの周りに群がるのが目的なのではなく、イエスに触れることが目的です。

ダニエルは、捕囚にとらわれたときにも目的をもっていました。「ダニエルは王の食物と、王の飲む酒とをもって、自分を汚すまいと、心に思い定めたので」(ダニエル 1:8)。目的を持って心を定めるといえるのは、失敗したときに、もう一度、自分で決心しなおすこととは違います。なぜなら、目的は自分にあるのではないからです。ダニエルの3人の友だちは、次のように言いました「わたしたちの仕えている神は、…わたしたちを救い出されます」(ダニエル 3:17)。このお方に、自分を合わせることです。

ですから、パウロは次のように勧めています。「競技場で走る者は、みな走り出すが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい」(コリント第一 9:24)。

「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ(キリストの品性を)捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」(ピリピ 3:12-14)。

「わたしは戦いをりっぱに戦いぬぎ、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした」(テモテ第二 4:7)。

走りぬくことができたのは、目的がはっきりしていたからです。但し、目標と成功は違います。例えば、ビジネスで考えますと、事業の拡大は、成功であっても目的ではありません。クリスチャンの目的は、パウロがあかした「この一時」です。神は高い標準を目指す者だけをお受け入れになります。

いました。彼らは地震の衝撃を感じ、同時に聖所と至聖所を隔っていた神殿の幕が、ベルシャザルの宮殿の壁に運命の言葉を書いたのと同じ青ざめた手によって上から下まで真二つにさかれました。地上の聖所の至聖所はもはや神聖なものではなくなりました。もう二度と神のご臨在が贖罪所をおおうことはありません。もう二度と大祭司の胸当てにある宝石に光や影によって神さまの承認やご不興を表すことはないのです。

これ以降、神殿での犠牲の血には何の価値もないのでした。神の小羊が死ぬことによって、世の罪のための犠牲となられたのでした。

キリストがカルバリーの十字架で死なれたとき、新しい生きた道がユダヤ人にも異邦人にも同じように開かれました。

天使たちは、救い主が「すべてが終わった」と叫ばれたときに喜びました。大いなる贖いの計画が実行されるのでした。アダムの子たちは従順な生涯を通して、ついに神のみ前に高められることができるのです。

サタンは敗北し、自分の王国が失われたことを知りました。

味噌ポテト

【材料】

ジャガイモ	10個、
薄力粉	120g、
片栗粉	40g、
水	100ml、
サラダ油	適量

(味噌だれ)

味噌	100g、
粗糖	100g、
あま粥(甘糍) / 水	40ml

【作り方】

- 1 味噌だれの材料を合わせて火にかけ、煮詰めて味噌だれを作ります。
- 2 ジャガイモはゆでて皮をむき、一口大に切ります。
- 3 薄力粉と片栗粉を水で溶き、衣を作ります。
- 4 ジャガイモに衣を付け、180度に熱した油で揚げます。
- 5 熱々のジャガイモに、味噌だれをかけていただきます。

埼玉県の秩父ではどこでも見る地元のおやつです。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

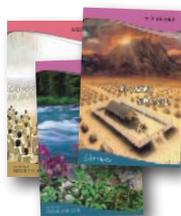


書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第51話

キリストの死(II)

そのあいだ暗闇がエルサレムとユダヤの平原にたれこめていました。すべての者の目が滅ぶべき都の方向へとむけられたとき、彼らは神の怒りのすさまじいならずまがこの都に向けられているのを見ました。

突然十字架のまわりの暗黒がはれ、天地に響き渡るようなはっきりしたラッパの調子でイエスさまは叫ばれました。

「すべてが終わった」(ヨハネ 19:30)。「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」(ルカ 23:46)。

ひとすじの光が十字架をとりまき、救い主のお顔は太陽のような栄光に輝きました。それからこのお方は頭を胸にたれて、息をひきとられました。

十字架の周囲にいた群衆は麻痺したように立ち尽くし、息を殺して救い主をじっと見あげていました。ふたたび暗黒が地をおおい、重々しいかみなりのような音が聞こえました。これに激しい地震がともないました。

人々は地震によってかたまりになって揺れました。激しい混乱と恐怖が続いて起こりました。まわりの山々では岩が真二つに割れて、音を立てて

下の平原になだれ落ちてきました。墓所が口を開き、多くの死人が投げ出されました。天地がこなごなになるように見えました。祭司たち、役人たち、兵士たち、人々は恐怖で声も出ず、地にひれ伏しました。

キリストの死の時に、ある祭司たちはエルサレムの宮でつとめをして



(43 ページに続く)